

## 古典期マヤ王権における 支配エリート層の働きについて

文学研究科歴史学専攻博士前期課程一年

糸山 隆志

### はじめに

古典期(AD250～925)のマヤは、かつては天文学・芸術・暦の計算などに没頭する神官によって支配された神権政治の社会であると考えられてきた。近年の研究の結果、そうではなく、世襲のエリート層に政治権力を委ねた階層政治であったことが明らかになった。しかしながらこの支配エリート層のいわゆる権力の程度や権力基盤については様々な議論がなされ、その決着を見ない。また従来の研究では、支配エリート層は王との関係性を中心に述べられてきた面が強く、彼らが王権やその維持に対してどのような働きを行ったのかという視点からの研究がまだまだ不十分であると考えられる。

本稿では先行研究によりながら、王と支配エリート層の権力基盤、彼らの王宮内での働きや王権との関連を考察し、今後の研究課題について明らかにしたい。

### 先行研究について

古典期マヤの政治機構・権力構造については、はじめにで触れたように議論が続けられているが、主な学説としては以下のような説が挙げられる。いずれも支配エリート層と被支配層という二つの区分があったことは前提条件として一致している。

#### ① イデオロギー中心の組織形態

デマレストらのように、その政治形態は整備された官僚機構を持たず、統治形態は、王と中心とする国家の求心力に基づくものであるとする説である。特に彼は管理エルトの必要性を認めながらも、マヤ国家における権力基盤は、王の行う儀礼等を通じて伝達されるイデオロギーにあり、国家による交易の統御や物理的な強制力による領土の統治は弱かったとしている。

#### ② 関係重視の組織形態

サンダースとウェブスター<sup>1)</sup>は、王による儀礼は表面的なもので、マヤの政治組織は血縁関係や王や従属するエリート層の個人的関係に基づいていたとしている。彼らはたがいに忠誠と保護などを与えることで関係を維持していたとし、権力構造は人と人との関係の網の上に成り立っているとみる。しかしながら、都市機能に関しては、全ての古代マヤの都市を王政儀礼都市 (regal-ritual city)<sup>2)</sup>と考え、権力基盤はやはりイデオロギー的な部分が大きかったと定義している。

③ 集権的、領土国家的組織形態

アダムスやカルバートらが主張するように、経済活動などに関する強い統御も含んだ、より集権的な統治機構があったとする説<sup>3</sup>である。日本においても、猪俣と青山がホンジュラスのラ・エントラーダ地域における黒曜石の分布から、少なくとも一部の奢侈品の流通に関しては支配エリート層による統御が行われていた可能性を示唆している。<sup>4</sup>また青山は、グアテマラのアグアテカ遺跡の黒曜石分布からも同様のことが言えると結論付けている。<sup>5</sup>

実際のいわゆる宮廷内における王やその臣下の役割そのものや、それらの時間的・空間的変化も問題点の一つである。

リーントの土器に描かれた図像の分析からも確認できるように、書記・手工芸職人・戦士・租税の管理人などの様々な役割を持つ人々がいたことは明らかである。<sup>6</sup>青山はアグアテカ遺跡の石器分析による使用用途と発掘場所の関連性から支配エリート層がこれらのうち複数の社会的役割を兼任していたことを明らかにし<sup>7</sup>、また宮廷の行政機能が複数の支配エリート住居に分散していたとしている。<sup>8</sup>

ウェブスター<sup>9</sup>は「第一エリート (primary elites)」と「第二エリート (secondary elites)」の存在を定義し、コパン遺跡を例にとつてその時間的変化を考察している。しかし、この変化がコパン特有のものなのか、それとも古典期マヤ社会全体に言えるものであるかは不明である。

おわりに

本稿ではいくつかの先行研究のまとめを中心に、支配エリート層に関する議論を検討してきた。従来の研究から鑑みて、彼らの組織形態と権力基盤については、やはりある程度の集権的統治機構の存在があったとする説が現状もつとも説得力のあるものだと思う。もちろん、マヤ王権における儀礼の重要性は明らかである。そのため、両者がどの程度支配形態に影響したのか、その割合を見極めていくことも研究課題の一つだと考えている。また実際の支配エリート層の働きに関しては、より具体的な例、たとえば遺跡ごとの比較を行い、共通点・相違点を明らかにして普遍化を行うことの必要性を感じている。博士前期課程二年間という限られた時間ではあるが、より多くの遺跡の比較を行っていきたい。

注

(1) Sanders, W. and Webster, D. 1988. pp.529-535

(2) Richard Gabriel Fox が著書 *Urban Anthropology* 内で提唱した先工業化社会における都市の三類型の一つ。先工業化社会において常に存在したイデオロギー・儀礼的役割が、極端に突出していた都市のことを指す。

(3) 青山・猪俣 一九九七年 一五三―一五七頁

- (4) 青山・猪俣 一九九六年 三七七頁
- (5) 青山 二〇〇三年 一一～一二頁
- (6) Reents, D. 2001 :pp.215-220
- (7) 青山 二〇〇三年 十七～二五頁
- (8) 青山 二〇〇四年 二五頁
- (9) Webster, D. 1992 :pp.136-137
- 〈参考文献〉
- ・青山和夫 二〇〇三 「古典期マヤ支配層の手工業生産と日常生活—テマラ共和国アテカ遺跡出土の石器分析を通じて—」 『古代アメリカ』(古代アメリカ学会) 第六号 一～三三頁
- ・青山和夫 二〇〇四 「古典期マヤ分目の戦争と武器—アテカ遺跡とコパン他に出土の石槍と石刃鏃を中心に—」 『古代文明』(古代学協会) 第五六巻一二号 六七九～六九四頁
- ・猪俣健 青山和夫 一九九七 「先産業社会における空間的配置と経済効率原理—古典期マヤ社会についての中心地分析—」 『民俗学研究』(文化人類学会) 第六一巻三号 三七〇～三九二頁
- ・サイモン・マーティン／ニコライ・グルーベ／長谷川悦夫他訳 二〇〇〇年 『古代マヤ王歴代誌』(創元社)
- ・Demarest, A. 1992 *Ideology in Ancient Maya Cultural Evolution. In Ideology and Pre-Columbian Civilizations* (Arthur A. Demarest and Geoffrey W. Conrad eds) :135-157. School of American Research Press
- Santa, New Mexico
- ・寺崎秀一郎 一九九八 「古典期マヤ政体の拡大—東南マヤ地域を例として—」 『史観』(早稲田大学史学会) 第一三八号 六六～八五頁
- ・マイケル・D・ロウ／加藤泰建他訳 二〇〇三 『古代マヤ文明』(創元社)
- ・Reents, D. 2001 *Classic Maya Concept of the Royal Court. In Royal Courts of the Ancient Maya Volume One : Theory, Comparison, and Synthesis* (Takeshi Inomata and Stephen D. Houston, eds) :195-233. Westview, Boulder.
- ・Sanders, W. and Webster, D. 1988 *The Mesoamerican urban tradition. In American Anthropologist* 90: pp.512-546
- ・Webster, D. 1992 *Maya elites: The perspective from Copan. In Mesoamerican Elites: An Archaeological Assessment* (Arlen F. Chase and Diane Z. Chase, eds) : 3-17. The University of Oklahoma